

# 特集にあたって

町北朋洋

読者の皆さんはヒッチハイクをしたり、ヒッチハイカーを車に乗せたりしたことがありますか。私は経験ありませんが、三〇数年以上も昔、父が仕事帰りに、オランダから新婚旅行で世界一周中のヒッチハイカーに呼び止められ、狭い家に彼らを泊めたことがあります。

翌朝、そのオランダ人カップル、彼らが抱える幼児（私）、そして英語が話せるわけでもなかった若い父母と撮った写真を手に取れば、たった一晚ですが、どうやって彼らはコミュニケーションを図ったのかと、不思議な思いが消えません。

## ●多様な本との出会い

「どうしたら人間は自らの生まれた文化の束縛を超えて、他者を理解できるか\*」という問題に対して読書が手助けになると考え、

この特集を企画しました。

今回、アジア経済研究所に在籍する研究者とOBを含めた二三名の方々に、自分の研究に役立つ本、印象に残っている本を三冊前後選んで頂きました。外国理解のための現地語と国語、コンピュータを動かすためのプログラミング言語、そして分析手法について激しい訓練を自らに課してきた方々です。あまりにも専門性の高い学術書から、安価で読みやすいが、しかし毒が含まれるものまで、数多くの本が集まりました。

示し合わせたわけではありませんが、一冊も重複はありません。これほどまで多様な本が紹介されるとは思いませんでしたし、我々が高いつお近づきになるべき格調高い、古典、正典ばかりが選ばれたということもありません。むしろ、立派な本がひとつも紹介され

ていない、立派なブックガイドもあります。

## ●ヒッチハイクしませんか

ばりばりと駆動力のあるブックガイドもあれば、自転車荷台に乘らされパンクを気にしながらノロノロ、でも心地良い風を感じるブックガイドもあります。読者のみなさんが願った通りの場所に連れて行ってくれる車もあれば、全く思い通りにならない車もあるでしょう。しかし、楽しい道草になること間違いありません。

読後に背筋がピツと伸びるブックガイドや、「この紹介文を読んでもおけば、案内された重厚な三冊は別に読まなくても良いかな」と思わせる記念碑的なガイドもあります。また、優雅さに乏しいブックガイドからは、もがき、苦しんできた研究者たちの絶唱とユーモ

アの炸裂音を聴き取ることができるとしよう。本との取っ組み合いから、高い志が維持し続けられている様子を楽しんでください。

そして、全く脈絡がなく、支離滅裂なブック・チョイスを見れば、不安をかき立てられること必至でしょう。「役に立たないからこの車を降りて他の人の文章を読もう」と思われるかもしれませんが、どうか、後で戻って来て下さい。

長いヒッチハイクの旅を経た後では、複雑であること、多様であることそれ自体が価値あるものと思えます。曖昧さを受け止めて許容すること自体が他者と社会への深い理解につながり、楽しみにつながるのかもしれない。

もう時間です。それでは、出発しましょう。

(まちきた ともひろ／アジア経済研究所 経済統合研究グループ「労働経済学」)

## 《注》

\*『ガラスの宮殿』（訳者あとがき）、アマタヴ・ゴージュ著、小沢自然・小野正嗣訳、新潮クレスト・ブックス、新潮社、二〇〇七年